

前
入 学 試 験 問 題
国 語 (文科)

(配点二二〇点)

令和五年二月二十五日 九時三〇分～一二時

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で二十二ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(表面二箇所、裏面一箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用にしてもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

草
稿
用
紙
(切り離さないで用いよ。)

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

いまさらいうまでもなく、仮面はどこにでもあるというものではない。日本の祭に常に仮面が登場するわけではない。世界に視野を広げても、仮面を有する社会は、一部の地域にしか分布しない。オセアニアでは、メラネシアでしか、仮面はつくられていない。アフリカなら赤道をはさんで南北に広がる熱帯雨林やウッドランド、サヴァンナ地帯だけで仮面がつくられている。南北アメリカやユーラシアでは広い範囲で仮面の制作と使用が確認できるが、それでもすべての社会に仮面が存在するというわけではない。いまひとつ、仮面が農耕やシユリヨウ・漁撈・採集を主たる生業とする社会にはみられても、牧畜社会にはみられないという点も忘れてはならない。いずれにせよ、仮面は、人類文化に普遍的にみられるものではけつしてない。

ただ、世界の仮面の文化を広くみわたして注目されるのは、仮面の造形や仮面の制作と使用を支える組織のありかたに大きな多様性がみられる一方で、随所に、地域や民族の違いを越えて、驚くほどよく似た慣習や信念がみとめられるという事実である。相互に民族移動や文化の交流がおこったとは考えられない、遠く隔たった場所で酷似した現象がみとめられるというのは、やはり一定の条件のもとでの人類に普遍的な思考や行動のありかたのあらわれだと考えてよい。その意味で、仮面の探求は、人間のなかにある普遍的なもの、根源的なものの探求につながる可能性をもっている。

地域と時代を問わず、仮面に共通した特性としてあげられるのは、それがいずれも、「異界」の存在を表現したものだという点である。ヨーロッパでいえば、ギリシアのディオニソスの祭典に用いられた仮面から、現代のカーニヴァルに登場する異形の仮面や魔女の仮面まで、日本でいえば、能・狂言や民俗行事のなかで用いられる神がみや死者の仮面から、現代の月光仮面(月からの使者)といわれる)やウルトラマン(M78星雲からやって来た人類の味方)に至るまで、仮面はつねに、時間の変わり目や危機的な状況

において、異界から一時的に来たり、人びとと交わって去っていく存在を可視化するために用いられてきた。それは、アフリカやメラネシアの葬儀や成人儀礼に登場する死者や精霊の仮面についてもあてはまる。そこにあるのは、異界を、山や森に設定するか、月に設定するか、あるいは宇宙の果てに設定するかの違いだけである。たしかに、知識の増大とともに、人間の知識の及ばぬ世界Ⅱ異界は、村をとりまく山や森から、月へ、そして宇宙へと、どんどん遠くへ退いていく。しかし、世界を改変するものとしての異界の力に対する人びとの憧憬^{しやうけい}、異界からの来訪者への期待が変わることはなかったのである。

ただ、忘れてならないのは、人びとはその仮面のかぶり手を、あるときは歓待し、あるときは慰撫^{いぶ}し、またあるときは痛めつけてきたことである。仮面は異界からの来訪者を可視化するものだといつても、それはけつして視^みられるためだけのものではない。それは、あくまでもいったん可視化した対象に人間が積極的にはたらきかけるための装置であった。仮面は、大きな変化や危機に際して、人間がそうした異界の力を一時的に目に見えるかたちにし、それにはたらきかけることで、その力そのものをコントロールしようとして創^{つく}りだしてきたもののように思われる。そして、テレビの画面のなかで繰り広げられる現代の仮面のヒーローたちの活躍もまた、それと同じ欲求に根ざしているのである。

ここでは、仮面が神や霊など、異界の力を可視化し、コントロールする装置であることを強調してきた。しかし、そのような装置は少なくとももうひとつある。神霊の憑依^{ひょうい}、つまり憑霊である。しかも、仮面は、これまで、憑依の道具として語られることが多かった。いちいち引用の出典を記すまでもない。仮面をかぶった踊り手には、霊が依り憑^つき、踊り手はその霊になりきるのだ。あるいは、仮面をかぶった踊り手はもはや仮面をかぶる前の彼ではない、それは神そのものだといった議論は、世界各地の仮面についての民族誌のなかに数多く見いだされる。

たしかに、神や精霊に扮^{かぶ}した者は、少なくとも何がしか神や精霊の属性を帯びることになるといふ信念が維持されていなければ、彼らとかかわることでは福や幸運が享受できるかもしれないという、かすかな期待を人びとが抱くことすら不可能になる。その意味で、儀礼における仮面と憑依との結びつきは、動かしえない事実のようである。

しかし、その一方で神事を脱し芸能化した仮面や子どもたちが好んでかぶる仮面に、憑依という宗教的な体験を想定することは

できない。仮面のありかたの歴史的变化が語っているのは、仮面は憑依を前提としなくなっても存続しようという事実である。そしてその点で、仮面は決定的に霊媒と異なる。霊媒は憑依という信念が失われた瞬間、存立しえなくなるからである。

仮面と憑依の相同性を強調した従来の議論に反して、民族誌的事実と歴史的事実は、このように、ともに仮面と憑依との違いを主張している。仮面は憑依と重なりあいつつも、それとは異なる固有の場をもっているのである。では、その固有性とは何か。それを考えるには、顔をもうひとつの顔で覆うという、仮面の定義に戻る以外にないであろう。そして、その定義において、仮面が人間の顔ないし身体をその存立の与件としている以上、仮面の固有性の考察も、私たちの身体とのかかわりにおいて進められなければならない。以下では、仮面を私たちの身体的経験に照らして考察することにする。

仮面と身体とのかかわり。それはいうまでもなく、仮面が顔、素顔の上につけられるものだという単純な事実に求められる。もちろん、世界を広くみわたしたとき、顔の前につける仮面は、必ずしも一般的だとはいえない。むしろ、顔と体の全体を覆ってしまうかぶりもののほうが多数を占めるかもしれない。しかし、その場合でも、顔が隠されることが要件であることは間違いない。変身にとって、顔を隠すこと、顔を変えることが核心的な意味をもつ理由をはじめて明確に示したのは、和辻哲郎であった。私たちは、たとえ未知の他人^{ひと}であっても、その他人の顔を思い浮かべることなしに、その他人とかわることはできない。また、肖像画や肖像彫刻にみるように、顔だけで人を表象することはできても、顔を除いて特定の人物を表象することはできない。このような経験をともに、和辻は「人の存在にとつての顔の核心的意義」を指摘し、顔はたんに肉体の一部としてあるのでなく、「肉体を己れに従える主体的なるもの座、すなわち人格の座」を占めていると述べたのであった。

この和辻の指摘の通り、確かに私たちの他者の認識の方法は顔に集中している。逆にいえば、他者もまた私の顔から私についてのもっとも多くの情報を得ているということになる。しかし、他者が私を私として認知する要^{かゝら}となるその顔を、私自身は見る事ができない。自分の身体でも他の部分なら鏡を使わずになんとか見えるのに、顔だけは絶対に見ることができないのである。和辻の言葉を借りていえば、顔は私の人格の座であるはずなのに、その顔は私にとつてもっとも不可知な部分として、終生、私につきまとうことになる。

顔は、しかも身体のなかでも、時々刻々ともつとも大きな変化を**ト**げている部分であろう。喜ぶとき、悲しむとき、笑うとき、苦しむとき、顔はひとときとして同じ状態でそこにあることはない。

もつとも他者から注目され、もつとも豊かな変化を示すにもかかわらず、決して自分ではみることのできない顔。仮面は、まさにそのような顔につけられる。そして、**他者**と**私**とのあいだの**新たな境界**となる。

ここで仮面が、木製のものと繊維製のものとを問わず、それぞれにほぼ定まった形をもつたものだという点を忘れてはならない。そのうえ、私たちは、その仮面、自分と他者との新たな境界を、自分の目で見て確かめることができる。仮面は、変転きわまらない私の顔に、固定し対象化したかたどりを与えるのである。したがって、「仮面をかぶると、それまでの自分とは違った自分になったような気がする」という、人ひとが漏らす感想も、固定された素顔から別のかたち**に**固定された顔への変化にともなう感想なのではない。それはむしろ、常に揺れ動き定まることのなかった自身の可視的なありかたが、はじめて固定されたことにともなうシヨウゲキの表明としてうけとられるべきである。また、精霊の仮面をかぶった男が精霊に憑依されたと確信するのも、そしてウルトラマンの仮面をかぶった少年がウルトラマンに「なりきれ」のも、仮面によつてかぶり手の世界に対する関係がそのかたちに固定されてしまうからにほかならない。

仮面は、私たちにとつて自分の目ではけつしてとらえられない二つの存在、すなわち「**異界**」と自分自身とを、つかの間にせよ、可視的なかたちでつかみ取るための装置なのである。

(吉田憲司「仮面と身体」による)

〔注〕 ○ディオニソス——ギリシア神話の酒の神。

○和辻哲郎——日本の倫理学者(一八八九—一九六〇)。

設問

(一) 「その意味で、仮面の探求は、人間のなかにある普遍的なもの、根源的なものの探求につながる可能性をもっている」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(二) 「仮面は憑依を前提としなくなっても存続しうる」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「他者と私とのあいだの新たな境界となる」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(四) 「『異界』と自分自身とを、つかの間にせよ、可視的なかたちでつかみ取るための装置」(傍線部エ)とはどのようなことを言っているのか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(五) 傍線部 a・b・c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a シュリヨウ b トげて c ショウゲキ

第二二問

次の文章は『沙石集』の一話「耳売りたる事」である。これを読んで、後の設問に答えよ。

南都に、ある寺の僧、耳のびく厚きを、ある貧なる僧ありて、「たべ。御坊の耳買はん」と云ふ。「とく買ひ給へ」と云ふ。「いかに買ひ給はん」と云ふ。「五百文に買はん」と云ふ。「さらば」とて、錢を取りて売りつ。その後、京へ上りて、相者のもとに、耳売りたる僧と同じく行く。相して云はく、「福分おはしまさず」と云ふ時に、耳買ひたる僧の云はく、「あの御坊の耳、その代錢かくのごとき数にて買ひ候ふ」と云ふ。「さては御耳にして、明年の春のころより、御福分かなひて、御心安からん」と相す。さて、耳売りたる僧をば、「耳ばかりこそ福相おはすれ、その外は見えず」と云ふ。かの僧、当時まで世間不階の人なり。「かく耳売る事もあれば、貧窮を売ることもありぬべし」と思ひ、南都を立ち出でて、東の方に住み侍りけるが、学生にて、説法などもする僧なり。

ある上人の云はく、「老僧を仏事に請する事あり。身老いて道遠し。予に代はりて、赴き給へかし。ただし三日路なり。想像するに、施物十五貫文には過ぐべからず。またこれより一日路なる所に、ある神主の有徳なるが、七日逆修をする事あり。これも予を招請すといへども行かんことを欲せず。これは、一日に無下ならば五貫、ようせば十貫、つはせんずらん。公、いづれに行き給はん」と云ふ。かの僧、「仰すまでもなし。遠路を凌ぎて、十五貫文など取り候はんより、一日路行きて七十貫こそ取り候はめ」と云ふ。「しからば」とて、一所へは別人をして行かしむ。神主のもとへはこの僧行きけり。

既に海を渡りて、その処に至りぬ。神主は齡八旬に及びて、病床に臥したり。子息申しけるは、「老体の上、不例日久しくして、安泰頼み難く候へども、もしやと、先づ祈禱に、真読の大般若ありたく候ふ」と申す。「また、逆修は、いかさま用意、仕り候ひて、やがてひきつき仕り候はん」と云ふ。この僧思ふやう、「先づ大般若の布施取るべし。また逆修の布施は置き物」と思ひて、

「安きことにて候ふ。参るほどにては、仰せに従ふべし。何れも得たる事なり。殊に祈禱は吾が宗の秘法なり。必ず靈驗あるべし」と云ふ。

「さて、酒はきこしめすや」と申す。大方はよき上戸にてはあれども、「酒を愛すと云ふは、信仰薄からん」と思ひて、「いかにも貴げなる体ならん」と思ひて、「一滴も飲まず」と云ふ。「しからば」とて、温かなる餅を勧めけり。よりて、大般若經の啓白して、かの餅を食はしめて、「これは大般若の法味、不死の薬にて候ふ」とて、病者に与へけり。病者貴く思ひて、臥しながら合掌して、三宝諸天の御恵みと信じて、一口に食ひけるほどに、日ごろ不食の故、疲れたる氣にて、食ひ損じて、むせけり。女房、子供、抱へて、とかくしけれども、かなはずして、息絶えにければ、中々とかく申すばかりなくして、「孝養の時こそ、案内を申さめ」と返しけり。

帰る路にて、風波荒くして、浪を凌ぎ、やうやう命助かり、衣裳以下損失す。また今一所の経営は、布施、巨多なりける。これも、耳の福売りたる効かと覺えたり。万事齟齬する上、心も卑しくなりにけり。

〔注〕 ○耳のびく——耳たぶ。 ○五百文——「文」は通貨単位。千文が錢一貫（二貫文）に相当する。

○相者——人相見。 ○世間不階——暮らし向きがよいくないこと。

○逆修——生前に死後の冥福を祈る仏事を修すること。 ○無下——最悪。 ○八句——八十。

○不例——病氣。 ○真読の大般若——『大般若經』六百卷を省略せずに読誦すること。

○置き物——ここでは、手に入ったも同然なことをいう。 ○啓白——法会の趣旨や願意を仏に申し上げること。

○法味——仏法の妙味。 ○孝養——亡き親の追善供養。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。
- (二) 「何れも得たる事なり」(傍線部エ)について、「何れも」の中身がわかるように現代語訳せよ。
- (三) 僧が「一滴も飲まず」(傍線部オ)と言ったのはなぜか、説明せよ。
- (四) 「中々とかく申すばかりなくして」(傍線部カ)について、状況がわかるように現代語訳せよ。
- (五) 「心も卑しくなりにけり」(傍線部キ)とはどういうことか、具体的に説明せよ。

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)

第三問

次の文章は唐の太宗、李世民（在位六二六〜六四九）が語つた言葉である。これを読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

朕聞晋武帝自平吳已後、務在驕奢、不復留心治政。何曾退朝、

謂其子劭曰、「吾每見主上、不論經国遠圖、但說平生常語。此非

貽厥子孫者也。爾身猶可以免。」指諸孫曰、「此等必遇乱死。」及

孫綏、果為淫刑所戮。前史美之、以為明於先見。

朕意不然。謂曾之不忠、其罪大矣。夫為人臣、当下進思

竭誠、退思補過、將順其美、匡救其惡。所以共為治也。

曾位極台司、名器崇高。当直辭正諫、論道佐時。今乃退有後

言進ミテハ無シテ廷諍シテ。以テ為ス明ハ智ト不ニ亦タ謬アマリナラ乎フ。顛たふレテ而ン不レ扶たすケ安クンゾ用ニ彼相ケンヤノ。

〔貞觀政要〕による

〔注〕

○晋武帝——司馬炎（二三六〜二九〇）、魏から禪讓を受けて晋を建てた。

○吳——国の名。

○驕奢——おごつてぜいたくであること。

○何曾——魏と晋に仕えた人物（一九九〜二七八）。子に劭、孫に綏がいる。

○淫刑——不当な刑罰。

○将順——助け従う。

○匡救——正し救う。

○台司——最高位の官職。

○名器——名は爵位、器は爵位にふさわしい車や衣服。

○廷諍——朝廷で強く意見を言うこと。

○相——補助する者。

設問

- (一) 傍線部 b・c・d を平易な現代語に訳せ。
- (二) 「爾身猶可_レ以免_二(傍線部 a)を、「爾」の指す対象を明らかにして、平易な現代語に訳せ。
- (三) 「後言」(傍線部 e)とあるが、これは誰のどのような発言を指すか、簡潔に説明せよ。
- (四) 「顛而不_レ扶、安用_二彼相_二(傍線部 f)とあるが、何を言おうとしているのか、本文の趣旨を踏まえてわかりやすく説明せよ。

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)

第 四 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

それぞれに独自の、特殊な、具体的な経験の言葉を、「公共」の言葉や「全体」の意見というレベルに抽象して引きあげてしまおうと
き、そうした公準化の手つづきのうちにみうしなわれやすいのは、それぞれのもつとりかえのきかない経験を、それぞれに固有な
しかたで言葉化してゆく意味Ⅱ方向をもった努力なのだ。たとえどのように仮構の言葉であつても、言葉は、その言葉をどう経験
したかという一人の経験の具体性の裏書きなしには、その額面がどんなにおおきくとも割れない手形ではない、ただ「そうとお
もいたい」言葉であるしかできない。

たとえば、「平和」や「文化」といったような言葉に、わたしはどんなふうに出会ったかをおもいだす。「平和」も「文化」も、どのよ
うにも抽象的になしかたで、誰もが知つて誰もが弁^{わきま}えていないような言葉として、観念の錠剤のように定義されやすい言葉だけ
ども、わたしがはじめてそれらの言葉をおぼえたのは、子どものころ暮らしていた川のある地方都市に新しくつくられた「平和通
り」「文化通り」という二つの街路の名によつて、日々の光景のなかに開かれた街路の具体的な名をとおしてだつた。

「舟場町」といった江戸以来の町名、「万世町」といった明治以来の町名をもつ古い小都市にできた「平和通り」「文化通り」といった
人通りのおおい新しい街路の名は、いかにも戦後という時代をかんじさせるものだつた。たかが街の通りの名というだけにすぎな
いかもしれないが、しかしわたしたちが戦後という一つの時代を経験することがなかつたならば、そうした言葉をそんなふうにし
かたで知るといふことはおそらくなかつただろう。「平和」という言葉、「文化」という言葉についてかんがえるとき、いまもまずお
もつかぶのは、わたしのそだつた地方の小都市の、殺風景だつたが、闊然^{かつぜん}としていた街路のイメージである。

一つの言葉がじぶんのなかにはいつてくる。そのはいつてくるきかたのところから、その言葉の一人のわたしにとつての関係の

根をさだめてゆくことをしなければ、言葉にたいする一人のわたしの自律をしつかりとつくつてゆくことはできない。言葉にたいする一人のわたしの自律がつらぬかれなければ、「そうとおもいたい」言葉にじぶんを預けてみずからあやしむことはないのだ。「そうとおもいたい」言葉にくみするということは、言葉を一人のわたしの経験をいれる容器としてでなく、言葉を社会の合言葉のようにかんがえるということである。

わたしたちの戦後の言葉が、たがいにもちあえる「共通の言葉」をのぞみながら、そのじつ「公共」の言葉、「全体」の意見というような口吻をかりて合言葉によつてかんがえる、一人のわたしの自律をもたない言葉との関係を、社会的につくりだしてきたということがなかつたか、どうなのか。合言葉としての言葉は、その言葉によつてたがいのあいだに、まずもつて敵か味方かという一線をどうしようなく引いてしまうような言葉である。しかし、言葉を合言葉としてつかつて、逆に簡単に独善の言葉にはしつて、たがいのあいだに敵か味方かというしかたでしか差異をみない、あるいはみとめないような姿勢が社会的につくられてゆくことへの怖れが、わたしのなかには打ち消しがたくあり、わたしは言葉というものを先験的に、不用意に信じきることとはできない。

言葉というものを、それを信じるものとしてでなく、むしろそれによつてみずから疑うことを可能にするものとしてかんがえた。わたしたちはふつう他者を、じぶんとの平等においてみとめるのではなく、じぶんととの差異においてみとめる。この単純な原理を活かすすべを、わたしたちの今日の言葉の大勢はどこか決定的に欠いているのではないか。「私」については饒舌に語りえても、他者について非常にまずく、すくなくしか語ることのできない言葉だ。そうしたわたしたちのもつ今日の言葉の足腰のよわさは、「共通の言葉」をのぞんでいまだそれをじゅうぶんに獲得しえないでいる結果であるというよりは、むしろ、わたしたちの言葉がみずから「差異の言葉」であることを正面きつて受けいれることができないままできたことの必然の結果、なのではないだろうか。

たがいのあいだにある差異をじゅうぶん活かしてゆけるような「差異の言葉」をつくりだしてゆくことが、ひつようなのだ。わたしたちはたがいに現にさまざまなかたち、位相で、差異をもちあっているのだから、一つひとつの言葉をとおして、わたしたちがいま、ここに何を共有し、えていないかを確かめてゆく力を、じぶんにもちこたえられるようにする。言葉とはつまるところ、一人

のわたしにとつてひとつような他者を発見することなのだ、とおもう。わたしたちは言葉をとおして他者をみいだし、他者をみいだすことによつて避けがたくじぶんの限界をみいだし、一つの言葉は、そこで一人のわたしが他者と出会う場所である。たいせつなのは、だから、わたしたちの何がおなじか、をでなく、何がちがうかを、まっすぐに語りうる言葉なのだ。

(長田弘『詩人であること』による)

〔注〕 ○割れない手形——現金化できない証券。

設問

- (一) 「観念の錠剤のように定義されやすい」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「言葉にたいする一人のわたしの自律」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「公共」の言葉、『全体』の意見というような口吻をかりて合言葉によつてかんがえる」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「二つの言葉は、そこで一人のわたしが他者と出会う場所である」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)